

## イナゴではなく、トノサマバッタ



「聖書」の「出エジプト記」10章の13節の途中から15節までを見てみましょう。「…朝になると東風がイナゴの大群を運んできた。イナゴの大群はエジプト全土を襲い、エジプト全域にとどまった。じつにおびただしく、こんなイナゴの大群は、前にもなかったし、この後にもないであろう。それらは全地の面をおおったので、地は暗くなった。それらは、地の草木も、雹(ひょう)を免れた木の実も、ことごとく食い尽くした。エジプト全土にわたって、緑色は木にも野の草にも少しも残らなかった」。

さらに、中学時代に読んだ小説に、こんなものがあります。「ある日、南の空に小さな雲が現れた。初めは地平線上に浮かぶ霞のようだったが、やがてそれが空に扇形に広がってきた。雲か霞かと思えたのは、実はイナゴの大群だった。そのうち空は暗くなり、無数のイナゴの羽音で大気が震えた。これに襲われた彼らの農作物はすべて食い尽くされてしまった」。中国清朝時代の農民の苦しい生活を舞台に描いた、パール・バックの小説「大地」に出てくる光景です。

「聖書」も「大地」もイナゴとっていますが、昔は突然大群が押し寄せ、農地に壊滅的な打撃を与えてきたのはイナゴと思われていました。ところが、イナゴは大群を作って飛び回るようなことはありません。このような生態を持つのはトノサマバッタか近縁のサバクトビバッタしかいません。

どちらもバッタのすさまじさを描写していますが、バッタが群れをなして飛ぶ様子は、現在であれば、テレビから流れる映像で知っている人も多いでしょうが、私が「大地」を読んだ中学時代は、テレビなどなかった時代ですから、頭の中で想像するしかありませんでした。それでも、その光景は強烈な印象として今でも残っています。

トノサマバッタといえば、我々の身近で見られる大型で頭と胸の部分が緑色のバッタですね。バッタの集団は普段はおとなしい緑色で孤独形(孤独相)とよばれる姿で生活しています。旱魃で食べ物が減って、えさをもとめて幼虫があつまり、お互いを刺激し、体から出る物質が密集した相手の体を刺激して、体は黒くなり、顔も四角になり、脂ぎって凶暴な群生形(群生相)のバッタに変身します。

日本でも1880～1884年(明治13年～17年頃)に、北海道の南半分の農作物を全滅させたという記録があります。

---